

# 『とほすがたり』における遊女邂逅譚

— 『撰集抄』との関わり —

蔡 佩 青

## 一 はじめに——二条における西行憧憬

鎌倉時代末期の作とされている『とほすがたり』は、後深草院二条が著した回想の日記である。全五巻から成り、巻一から巻三までは二条が後深草院女房としての生活が、巻四、巻五は出家した彼女の諸国遍歴が記されている。二条は、『とほすがたり』を執筆する契機について、次のように書いている。

九つの年にや、西行が修行の記といふ絵を見しに、かたがたに深き山を描きて、前には河の流れを描きて、花の散りかかるに居て眺むるとて、

風吹けば花の白波岩越えて渡りわづらふ山川の水

と詠みたるを描きたるを見しより、うらやましく、難行苦行は叶はずとも、我も世を捨てて、足にまかせて行きつつ、花の下露の情をも慕ひ、紅葉の秋の散る恨みをも述べて、かかる修行の記を書き記して、なからん後の形見にもせばやと思ひしを（以下略）

（『とほすがたり』巻一・七三頁）

さても宿願の行く末いかがなり行かんとおぼつかなく、年月の心の信もさすが空しからずやと思ひ続けて、身の有様を一人思ひるたるも飽かずおぼえ侍る上、修行の心さしも、西行が修行のしき、羨ましくおぼえてこそ思ひ立ちしかば、その思ひを空しくなさばかりに、かやうのいたづら事を続けて置き侍るこそ。後の形見とまでは、おぼえ侍らぬ。

（『とほすがたり』巻五・三三〇頁）

傍線部にあるように、巻一において二条は、幼い頃に見た「西行が修行の記」という絵に描かれた西行に対する憧れが、出家を決意し修行の記を書き記すきっかけであったことを述べている。また、巻五の巻末で、ふたたび西行憧憬の思いを強調している。「西行が修行の記といふ絵」と「西行が修行のしき(式・私記)<sup>①</sup>」は、現在われわれが言う『西行物語』と同じようなものと思われる。『西行物語』と『とほすがたり』とを比較すると、二条の自記通り、『とほすがたり』作品全体にわたり、『西行物語』の影響が多く見受けられる。このような傾向に対し、これまでの先行研究は『とほすがたり』における西行について、様々な角度から論じている。

二条はひたすらに西行の行脚修行を模倣するだけではなく、生き方そのものに強い影響を受けている、と和田英道氏は指摘している。<sup>②</sup>氏は、

西行が妻子を捨て世間を捨て、花月に執し歌に執した果てに至り着いた境地に、二条は自分を

捨てたはずの院に徹底して執着することによって辿り着いたのである。そうしてみると、院が二条を悟道へと誘った善知識であるとすれば、西行は〈物〉に執し徹底することを教えてくれた師といえよう。

と述べ、二条が西行の歩みを追体験することで、ついには人間の真性を悟るという点で、二人は重なり合っていると述べている。

また、高木美智子氏は、作品中に描かれている後嵯峨院、作者の父雅忠、有明の月の三人の臨終場面に着目し、「西行の「臨終正念」が理想としてあつたからこそ、二条を取り巻く人々が、現世に心をとどめたまま往生際悪く死んでいったという理想に反する臨終の様は、一層リアルに描かれることとなった」と述べている<sup>(3)</sup>。つまり二条は、西行の往生のような理想的な「死」を求めていると言えよう。西行が自作歌のとおり、桜の満開時、釈迦入滅の二月十五日に往生を遂げたということが、『西行物語』に描かれている。物語の内容は『古今著聞集』にまで遡るが、二条が見たのは『西行物語』のたぐいの作品であろう。

一方、二条の西行憧憬は実践的であり、それが行動にも現れているという指摘もある。標宮子氏は、『とはすがたり』の巻四、五に描かれている紀行文を中心に論じ、「二条尼が、西行の愛した月とともに旅立ちをなし、紀行編の巻頭歌としてこれも西行の愛した桜を詠んだ歌を配置するのも、彼女の旅そのものが西行のまねびによるもの」と述べている<sup>(4)</sup>。また、作品中に見られる西行歌の撰取や描写の類似なども多く指摘されている。太田由紀子氏は『とはすがたり』の記述と二条の詠歌のうち、西行歌を本歌としたものを取り上げて論じ<sup>(5)</sup>、志村有弘氏は、二条が裸足で後深草院の柩を追いかけるという作品のクライマックスは、西行が鳥羽院の死に出逢った場面に酷似すると注目している<sup>(6)</sup>。

確かに『とはすがたり』を読むと、所どころ『西行物語』の場面が浮かんでくる。上述の他にも、父雅忠が二条に残した遺言は、『西行物語』で西行が娘に出家を勧める言葉を彷彿とさせ、また、二条が東二条院の崩御に偶然に巡り会う描写は、同じく西行が親友の憲康の急死に遭遇し、出家を思い立つ場面を想起させる。

以上のように、「西行が修行の記」をめぐる回想から窺われる二条の西行憧憬には、生き方への影響とその憧れを実践した具体的な行動への影響の、二つの側面が挙げられる。しかし、「西行が修行の記」という絵およびその物語本文が、現存する『西行物語』諸本のいずれに相当するかは確定できない<sup>(7)</sup>。加えて、『とはすがたり』の記述や所収歌には、西行歌の撰取が見られるため、恐らくは西行に関する書物を多く通読していたのであろう。例えば、『とはすがたり』における二条の旅の様式は、作者を西行に仮託した『撰集抄』に描かれている、語り手が諸国を遍歴して様々な出家通世者に出会って交流するという、いわゆる西行邂逅譚の類型<sup>(8)</sup>を見て取ることもできる。ことに二条が旅中に遊女に出会う場面には、『撰集抄』における遊女邂逅譚に相似する要素が多く見られる。本論では、二条と遊女との邂逅を手掛かりに、『とはすがたり』と『撰集抄』の関連性を考えたい。

## 二 二条と遊女との邂逅

遊女は、中世の西行像を語る際には決して外せない要素の一つである。西行と遊女との交流は、本来は、西行家集や『新古今和歌集』に収められている贈答歌のみであったが、そこから展開したものは、例えば『撰集抄』に見られる、遊女が西行に身の上を語る描写のように、強い物語性を以て伝えられている。そして、そこに語られた遊女の姿は、『とほすがたり』に採取され、さらなる変容を遂げていると考える。

二条は都を立ち東国への旅の途上で四度、遊女の姿を目撃したと、『とほすがたり』に記している。次に掲げる①～④の引用文はその場面である。

- ① ならばぬ旅の装ひいとあはれにて、休らはるるに、いと盛りと見ゆる桜のただ一本あるも、これさへ見捨てがたきに、田舎人と見ゆるが、馬の上四、五人、汚げならぬが、またこの花の下に休らふも、同じ心にやとおぼえて、

行く人の心を留むる桜かな花や関守逢坂の山

など思ひ続けて、鏡の宿といふ所にも着きぬ。

暮るる程なれば、遊女ども契り求めてありくさま、憂かりける世のならひかなとおぼえて、

- (a) いと悲し。明け行く鐘の音にすすめられて出で立つも、あはれに悲しきに、

立ち寄りて見るとも知らじ鏡山心の中に残る面影

(『とほすがたり』巻四・二二七～二二八頁)

- ② やうやう日敷経る程に、美濃国赤坂の宿といふ所に着きぬ。ならばぬ旅の日数もさすが重なれば、苦しくもわびしければ、これに今日とはどまりぬるに、宿のあるじに、若き遊女姉妹あり。琴・琵琶など弾きて情あるさまなれば、(b) 昔思ひ出でらるる心地して、九献などらせて遊ばするに、一人ある遊女の姉とおぼしきが、いみじく物思ふさまにて、琵琶の撥にて紛らかせども、涙がちなるも、身のたぐひに覚えて目とどまるに、これもまた、墨染の色にはあらぬ袖の涙をあやしく思ひけるにや、盃据ゑたる小折敷に書いて差しおこせたる。

思ひ立つ心は何の色ぞとも富士の煙の末ぞゆかしき

- (c) いと思はずに、情ある心地して、

富士の嶺は恋を駿河の山なれば思ひありとぞ煙立つらん

慣れぬ名残はこれまでも引き捨てがたき心地しながら、さのみあるべきならねば、また立ち出でぬ。

(『とほすがたり』巻四・二二八～二二九頁)

- ③ かやうの物隔たりたる有様、前には人間川とかや流れたる、向へには岩淵の宿といひて遊女どもの住みかあり。山といふものはこの国中には見えず。はるばるとある武蔵野の、葎が下折れ、霜枯れ果ててあり。中を分け過ぎたる住まひ思ひやる。都の隔たり行く住まひ、悲しさもあはれさも、取り重ねたる年の暮なり。

- (d) つらつら古へをかへりみれば、二歳の年母には別れければ、その面影も知らず。

(『とほすがたり』巻四・二四六頁)

④ 何となく賑ははしき宿と見ゆるに、たいが鳥とて離れたる小島あり。遊女の世を連れて、庵並べて住まひたる所なり。さしも濁り深く、六つの道にめぐるべき営みをのみする家に生れて、衣裝に薰物しては、先づ語らひ深からんことを思ひ、わが黒髪を撫でて、誰が手枕にか乱れんと思ひ、暮るれば契りを待ち、明くれば名残を慕ひなどしてこそ過ぎ来しに、思ひ捨てて籠りみたるもありがたくおぼえて、「勤めには何事かする。いかなる便りにか発心せし」など申せば、ある尼申すやう、「我はこの島の遊女の長者なり。あまた傾城を置きて、面々の顔はせを営み、進行く人を頼みて、とどまるを喜ひ、漕ぎ行くを嘆く。また知らざる人に向ひても、千秋万歳を契り、花の下露の情に酔ひを勤めなどして、五十に余り侍りしほどに、宿縁や催しけん、有為の眠り一度醒めて、二度故郷へ帰らず、この島に行きて、朝な朝な花を摘みにこの山に登る業をして、三世の仏に手向け奉る」など言ふも、(c)「うらやまし。これに一二日とどまりて、また漕ぎ出でしかば、遊女ども名残惜しみて、「いつ程にか都へ漕ぎ帰るべき」など言へば、(f)「いさや、これや限りの」など覚えて、

いさやその幾夜明石の泊りともかねてはえこそ思ひ定めぬ

(『とはずがたり』巻五・二八六―二八七頁)

まず、引用文①と②にあるように、二条は旅の始まりに、鏡の宿で遊女たちが一夜の契りを求める姿を目にし、美濃国で遊女の姉妹に出会って交流を求めた。続いて、引用文③には、川の向こうにある遊女の宿を眺めることが描かれている。そして引用文④には、遊女たちが世を連れて住んでいる島を訪れた二条が、遊女の発心のきっかけを問い、その長者を自称する尼の答えに羨ましさを感じ、一日ほど島にとどまっていたと記されている。

これら二回(引用文②と④)の、二条と遊女の交渉、加えて作品の前編(巻一―巻三)に登場した遊女や白拍子について、加賀元子氏は次のように論じている<sup>9)</sup>。

作者自身を言い表す語が遊女に共通して用いられていることを指摘できたが、このことから、やはり作者は遊女の身の上に自己を重ね見ている。(中略)『とはずがたり』に埋め込まれている遊女を手練つていくと、遊女の登場と作品中の言動に対しての作者の配慮が伺える。ここで、作者は作品に書き記した遊女に自己の生を語らせようとしているのではないかと思われ、作者の生の代弁者としての遊女が浮かび上がってくるのである。

また、阿部泰一郎氏は加賀氏の指摘を踏まえながらさらに、二条を一人の女性芸能者と看做して、「二条の出家の消息は、巻三と巻四の間の空白に託され、むしろ鮮やかに前半の宮廷での生と後半の遁世修行の生とを際立たせている。その代わりというべく出家遁世をめぐって登場する傾城・遊女・白拍子ら女人の存在は、上述したような女性芸能者の出家遁世物語を前提として、それを投影したものか」と述べている<sup>10)</sup>。

確かに、二条が常に遊女の存在に留意している理由は、彼女自身を遊女に重ね合わせた結果と解すれば、理解できる。二条の旅における最初の宿で、二条がまず目に留めたのは、「悲し(引用文①の(a))」と感じさせるような、遊女たちの姿であった。次いで美濃国では、若き遊女の姉妹に出会い、遊女の問いかけの歌に、「いと思はずに、情ある心地して(引用文②の(c))」返歌をした。こ

ここで初めて二条の出家の理由が語られた。また、善光寺参詣の念願が果されないまま川口に向かった二条は、遊女の宿場がある岩淵に、まず目を向ける。そして、つらつらと我が身を振り返って、母に先立たれたこと、院の寵愛を受けたこと、仏門に入りたいと思いつつなお宮中生活を離れられなかったことなど、懺悔を始める(引用文③の(d))。ここで二条は、引用文②で見たような控え目な態度とは対照的に、心の底に秘めていた感情を少しずつはき出している。最後に、たいが島に至っては、二条はより積極的に遊女と向き合って、遁世の道を選んだ傾城たちのこと「うらやまし(引用文④の(e))」く思うようになったのである。

二条の目が絶えず追いかけて続けた遊女の姿は、彼女そのものでもある。二条は自分自身を描くために、遊女を描いてきたとも言えよう。そして、そのような彼女が描く遊女の物語には、『撰集抄』が語る遊女の出家遁世物語に共通するものがあると考ええる。

### 三 西行と遊女との邂逅

諸作品に見られる、西行と遊女との出会いは、次に掲げるテキストのように、西行家集と『新古今和歌集』に収められている贈答歌に由来するものである。

天王寺へまゐりけるに、雨の降りければ、江口と申す  
所に宿を借りけるに、貸さざりければ  
世の中を厭ふまでこそかたからめ仮りの宿りを惜しむ君かな  
返し  
家を出づる人とし聞けば仮りの宿心とむなと思ふばかりぞ

(『山家集』七五二・七五三)

\* 返歌の初句「家を出づる」は『西行上人集』『新古今和歌集』では「世をいとふ」とあり、作者に「遊女たぐ」と「遊女抄」とある。なお、『西行上人集』には左注として「かく申して宿したりけり」と見える。

この贈答歌を元に展開した西行の遊女邂逅譚には、『西行物語』が描く江口の君および『撰集抄』が語る出家を志す江口の遊女が見られる。『西行物語』には次のような内容が描かれている。

天王寺へ参りける道にて雨の降りければ、江口の君がもとに宿を借りけるに、貸さざりければ、君のならひせいくとある人をこそとゞめんとすれ、たゞ一人まよひありく入道に宿かさぬはことほりと覚えて  
世の中を厭ふまでこそかたからめ仮りの宿りを惜しむ君かな  
これを見て、さすが心ある君にて、人をはしらかしてかくぞ  
世を厭ふ人とし聞けば仮の宿に心とむなと思ふばかりぞ

(文明本『西行物語』下)

『西行物語』の挿話は、出典の西行家集ないし『新古今和歌集』に書き記されている詞書とは、さほど変わらない内容を伝えている。二条は『西行物語』と思しき物語絵を見たことを二度も記しているため、このくだりも読んでいたのであろうが、次に掲げる『撰集抄』の説話のほうが、二条

に遊女邂逅譚のヒントを与えたのではないかと考える。

『撰集抄』には、遊女の出家遁世をめぐる説話は、「江口遊女事」「江口尼事」「室遊女捨世」という三話が収められている<sup>(1)</sup>。その中で、「江口遊女事」は西行と遊女との贈答歌より展開した『撰集抄』の類型説話である。そして「江口尼事」は、「江口遊女事」に基づいて作られたもう一つの江口遊女説話と考えられている。また「室遊女捨世」は、『閑居友』に見られる「室の君、顕基に忘れて道心発す事」に由来するものと思われる。まず、「江口遊女事」の本文を見てみよう。

過ぎぬる長月廿日あまりの比、江口と云ふ所を過ぎ侍りしに、家は南北の河岸にさしはさみ、心は旅人の行き来の船を思ふ遊女の有様、いと哀れにはかなきもの哉と見たてりし程に、冬を侍ちえぬ村時雨をさえくらし侍りしかば、けしかるしづがふせやに立ちより、晴れ間待つ間の宿を借り侍りしに、(A)あるじの遊女許す気色の見え侍らざりしかば、なにとなく

世の中を厭うふまでこそかたからめ飯の宿り惜しむ君かな

と読みて侍りしかば、(B)あるじの遊女うちわらひて

家を出づる人とし聞けばかりの宿に心とむなと思ふばかりぞ

と返して、(C)いそぎ内に入れ侍りき。此歌の面白さに一夜のふしど、し侍りき。

このあるじの遊女は、今は四そち余りにや成ぬらん、みめことがらさもあてにやさしく侍りき。夜もすがら、何となく事ども語りし中に、此遊女の云やう、「いとけなかりしより、かゝる遊女と成り侍りて、年比その振る舞をし侍れども、いとびんなく覚えて侍り。(中略)」とて、しやくりもあへず泣くめり。

此こと聞くに、あはれに有難くおぼへて、墨染の袖しほりかねて侍りき。夜明け侍りしかば、名残はおほく侍れども、再会を契りて別れ侍りぬ。(中略)

さて、約束の月、尋まかるべきよし思ひ侍りし程に、或上人の都より来て、打まぎれて、空しく成ぬる本意なさに、便の人を語ひて、消息し侍りしに(中略)

よもをろくの宿善にても侍らじ。世々にたくわへおきぬる戒行どもの、江口の水にうるをされぬるにこそ。歌さへ面白くぞ侍る。さても又、「此夜すきなばと思ひ、暁には、あけなばと涙を流す」と語り侍りし心の、つみにうちつゞきぬるにや、さまかへぬるは。その後も尋まかりたく侍りしを、さまかへて後は、江口にも住まずとやらむ聞き侍りしかば、彼遊女の最後の有様、なにと侍るべきと、返す々ゆかしく侍り。(以下略)

(『撰集抄』 卷九十八「江口遊女事」)

『撰集抄』において、西行と遊女との歌の贈答は説話の皮切りに過ぎない。傍線部(A)、(B)、(C)を見ると分かるように、『撰集抄』は出典を踏襲しながら、遊女の言動をより鮮やかに描き出している。雨宿りのつもりだった西行は、一夜を過ぎして遊女の身の上話と出家願望を聞き、再会の約束をした。しかし再会は果たされず、消息を交わすだけに終わった。いわゆる『撰集抄』における西行邂逅譚という話型には、語り手西行が会おう人は、必ず発心・出家・遁世を遂げた道心深い人として設定されているため、ここでの西行と遊女との邂逅も、雨宿りのみにとどまらなかったのである。つまり、西行が遊女の出家を確認することは、『撰集抄』の説話として必然的な展開と言える。

西行家集や『新古今和歌集』では、最低限の詠作事情しか語らなかつたが、『撰集抄』においては、仏道の先達である西行が、遊女との対面で果たした役割は、遊女の出家物語を聞き出すことであつた。

そして、説話の終わりに、「その後も尋まかりたく侍りし」とあり、西行は江口遊女の事が心に残っている様子が語られている。ここで敷いた伏線が、『撰集抄』においては、さらなる展開を見せ、もう一編の説話をなしている。次に掲げる「江口尼事」は、かの出家を遂げた遊女の後日談と思しき内容が書かれている。

治承二年長月の比、或聖とともなひて、西の国へ趣きしに、さしていつく共なきまゝに、日のかたぶくにもいそがずして、江口柱本などいふ遊女がすみか見めぐれば、家は南北の岸さしはさみて、心は旅人のしばしの情けを思ふ様、さもはかなきわざにて、さても空しくこの世を去りて、来世はいかならん。是も前世の遊女にて有るべき宿業の侍りけるやらん。露の身のしばしの程をわたらむとて、仏の大きにいましめ給へるわざをする哉。我が身一の罪は、せめていかゞせむ、多くの人をさへ引き損ぜん事、いとゞうたてかるべきには侍らずや。

しかあれ共、かの遊女の中で、たゞ往生をとげ、浦人の物の命を断つもの、中に、終はりいみじき侍り。こは、されはいかなる事ぞや。前世の戒行によるべくは、なにとてか今生にかゝるうたてき振舞をすべきや。又此世のつとめによるべくは、あに彼等往生をとげむや。

是をもて閑に思ふに、唯心によるべきにや。露命をつがんとての謀事侍れば、心にもあらず、是に交り彼にともなへ共、是に心を移さず彼に心をしめて、常に後の世の事を思はん人は、口に悪しきこと葉をはき、手にわるき振舞侍れ共、心うるはしく侍らむには、さら成けるにや侍らんと、或聖と打語ひて、其里を過ぎらんとするに、冬を待えず村時雨のはげしくて、人の門に立やすらひて、内を見入れ侍るに、あるじの尼の、時雨のもりけるをわびて、板を一ひちさげて、あちこち走りありきしかば、無何かく、

しづがふせ屋をふきぞわづらふ

とうちすさみたるに、此尼、さばかり物さはがしく走りありつるが、何とてか聞けむ、板をなげ捨て、

月はもれ時雨たまれと思ふには

と付侍りき。さも慶に覚えて、見過ぐしがたかりしかば、かの庵に一夜とまりて、連歌などし侍りて（中略）

六十余州さすらへて、多くの人に見なれしか共、是程の物にて、かくまで情けはみたる物は侍らざりき。（以下略）

（『撰集抄』巻五十一「江口尼事」）

西行は遊女との再会を果たしたと言いたいのであろう。西行が雨宿りをした宿の主は、もはや、歌で西行を拒絶した時の遊女ではなく、出家の念願を果し尼となっていた。やはり時雨に降り込められた時をきっかけに一夜とどまり、尼となつた遊女と交流をしたのである。

小川寿子氏が指摘したように、『とはすがたり』におけるたいが島の遊女の長者の述懐部分は、『撰

『撰集抄』に描かれた「あるじの遊女」の述懐に類似している<sup>12)</sup>。しかし『とはずがたり』は、単に『撰集抄』の説型を模倣しているだけではない。『撰集抄』説話に見られる、語り手西行が出会った江口の君、聖と語り合った遊女、そして連歌を交わした尼とを、『とはずがたり』に描かれている遊女たちと対照してみると、両者の間は同化しているように見える。

次に取り上げる二条が遊女の言動と様子に対する感情描写によって、より明白に読み取れるのであろう。

### ■『とはずがたり』における二条と遊女

引用	遊女と出逢う場所	遊女の言動・様子	二条の感情表現
①	鏡の宿	遊女ども契り求めてありくさま	(a)いと悲し
②	美濃国	二人ある遊女の姉とおほしきが、いみしく物思ふさまにて、琵琶の撥にて紛らかせども、涙がちなるも、	(b)昔思ひ出でらるる心地して (c)いと思はずに、情ある心地して
③	岩淵の宿	(遊女の武蔵野の荒れたる住か)	(b)つらつら古へをかへりみれば
④	たいが島	(尼の遊女の述懐)	(e)うらやまし

二条が描いた遊女も遁世の道に入っている。二条は最初に遊女の遊び姿を目にした時に、「いと悲し」と思い、琵琶の撥が乱れる姉の遊女に恋ゆえの出家の心情を漏らして、次いで岩淵の遊女を見てようやく、我が身を振り返って自省し、確認することができた。二条の自省は、西行に身の上を打ち明ける遊女と重なり合っているのではなかろうか。二条も西行のような先達の導きが望んでいたに違いない。さらに二条は、自ら遊女のもとへ発心遁世の因縁を伺いに行った。

遊女との交流を通して心境を語り始めた二条は、能動的な言動を取るようになり、西行のような出家遁世者を発見する役割を果たしていると言えよう。二条は、『西行物語』における修行の旅を模倣するだけでなく、『撰集抄』における西行像に影響をも受けているのである。世を離れた遊女を探り出し、発心の因縁を問いかけるのも、遊女と看做している自分が選んだ道を再確認するためのものであった。「いさや、これや限りの(さあ、もうこれが最後だ) (引用文④の(f))」という言葉は、もうこの島へ二度と来ないということの意味すると同時に、二条の懺悔の旅が終わりを告げる時が来ていることを示す。もう二度と遊女のような彷徨う思いを抱えずに済むことを確認し、父の菩提を弔うため、そして有明の月の聖霊得脱成仏のためでもある、五部大乘経の書写に専念することができたという決意の回答ではないか<sup>13)</sup>。事実二条の五部大乘経の書写と奉納は、ここから本格的に行われ、巻五に集中して描かれている。

#### 四 仮の宿りを惜しむ君―結びにかえて

最後に、『撰集抄』から『とほすがたり』への影響を、もう一箇所確認したい。次に引用するように、『とほすがたり』巻四では二条が伊勢に籠るくだりが描かれている。

うちまかせての社などのやうに経を読むことは、宮の中にはなく、法樂社と言ひて、宮の中より四五町のきたる所なれば、日暮し念誦などして、暮るる程に、それ近く、観音堂と申して尼の行ひたる所へまかりて、宿を借れば、「叶はじ」と固く申して、情なく追ひ出で侍りしかば、

世を厭ふ同じ袂の墨染をいかなる色と思ひ捨つらん

前なる南天竺の枝を折りて、四手に書いて遣し侍りしかば、返しなどはせで、宿を貸して、それより知る人になりて侍りき。

（『とほすがたり』巻四・二六六―二六七頁）

経を読むのは外宮の社中ではなく、少し離れたところで行うため、二条はある尼に宿を借りることにした。これまでの遊女邂逅譚とは違い、相手は最初から尼と設定されているが、明らかに西行の雨宿り譚を踏まえて書かれたものである。殆どの注釈書には、このくだりは西行家集や『西行物語』を念頭に置いての記述であると指摘されているが、いままで考察してきた遊女に関する描写と併せて考えると、『とほすがたり』の描写には『撰集抄』からの影響が多かったのではなからうか。『撰集抄』説話では、前引したように、西行を許す気色が見えない遊女に歌を以て強請したところ、遊女は「うち笑ひて」返歌してから、急いで西行を入れることにしたと描かれている。一方、宿を借りようとする二条は、固く断られたうえで追ひ出される羽目に陥つた。しかし、西行と同様に、歌を詠むことで宿を借り得たのである。そして、それ以来二人は知己にまでになったという。これも江口の遊女が西行と打ち解け、消息を交わすことや、後日談で連歌を交わすといった、親しい交流を彷彿とさせる。

二条と同じ修行の身であり、神宮内に居を定めていた尼は、なぜ二条を拒む行動を取らなければいけなかったのか。心を静めて読経をしていたはずの尼のこのような言動には、いささか違和感を覚える。『とほすがたり』には多くの虚構が内包されていることが、すでに指摘されている<sup>(13)</sup>。二条が作品を仕上げる際に、彼女自身が抱えている苦悶を遊女に反映させる一方、西行と遊女が取り交わした雨宿りの名場面を切り捨てられなかったことも、彼女の西行憧憬が強かったことの表れと言えよう。

「世の中を厭ふまでこそかたからめ仮の宿を惜しむ君かな」と詠じた西行に、江口の遊女は「世を厭ふ人とし聞けば仮の宿に心止むなど思ふばかりぞ」と返した。それに対し、二条は、尼の頑なな態度に、「世を厭ふ同じ袂の墨染をいかなる色と思ひ捨つらん」と返歌をした。同じ世を厭う心を持つてゐるあなたは、どうして私を見捨てるのか、という二条の言葉には、同じ尼となった身としての悔しさが滲み出ており、修行の困難さが浮き彫りとされている。そして、西行の詠歌に倣って受け入れられたと語ることで、西行との同化をなしているのである。二条の西行憧憬は、単に『西行物語』における西行精神を模倣することにとどまらず、『撰集抄』に書かれている出家遁世者の

物語を語る西行にも似せているのである。

【注】

- (1) 谷口耕一氏は、「さいぎやうが修行のしき」の「しき」について、「式」と当てるべきではなく、「私記」を当てて、「西行が修行の私記」と解すべき」と指摘している（『西行物語の形成』『文学』vol.46、一九七八年一〇月）。
- (2) 和田英道『とはすがたり』における西行と二条『とはすがたり・中世女流日記文学の世界』女流日記文学講座・第五巻、勉誠社、一九九〇年。
- (3) 高木美智子『とはすがたり』の「離別と再会」について『西行物語』との共通点より『香椎潟』第四四巻、一九九九年三月。
- (4) 標宮子「女人の諸国行脚―とはすがたり―」『国文学解釈と鑑賞』第七一卷三号、二〇〇六年三月。
- (5) 太田由紀子『とはすがたり』における西行歌の受容『金沢大学国語国文』第一四巻、一九八九年二月。二条が「山のあなたの住ひのみ願はしけれ」と出家を願う記述、亡くなった有明の月に対する嘆きに詠じた「月を待つ暁までの遅かさに今入りし日の影ぞ悲しき」の歌、武蔵野で詠じた「雲の上に見しもなかなか月ゆゑの身の思ひ出は今宵なりけり」の歌、そして後深草院の崩壊にあつたときに詠じた「露消えし後の御幸の悲しさに昔に帰るわが袂かな」の歌は西行歌を本歌としたものである。
- (6) 志村有弘「後深草院二条―とはすがたり―作者―」『説話文学の構想と伝承』明治書院、一九八二年。
- (7) 松平本系『西行物語』には、「風吹けば」の歌が収められているが、二条の目にした「西行が修行の記といふ絵」とは同じ系統のものであるかは判断しがたい。
- (8) 近本謙介氏は「西行が「出会う」・「発見する」などの話型に属するものを、広く西行邂逅譚と称」すと定義し、「虚構の西行邂逅譚を最も意識的に集の内に方法として確立させ、西行が何者かと邂逅を遂げるといふ話型に、極端なまでの執着を見せた嚆矢は、やはり『撰集抄』と考えなければならない」と指摘している（『西行邂逅譚の系譜―『撰集抄』の文学史的定位のために―』『伝承文学研究』第五〇号、二〇〇〇年五月）。
- (9) 加賀元子『とはすがたり』における「遊女―その意義―」『武庫川国文』第四二巻、一九九三年二月。
- (10) 阿部泰郎『とはすがたり』と白拍子の物語―出家遁世をめぐる―『国文学解釈と鑑賞』第六九巻六号、二〇〇四年六月。
- (11) 卷六一〇「性空上人事」においても、室の遊女が描かれているが、性空上人の若かりし事および生身菩薩を拜む事を説話の中心としている。
- (12) 小川寿子「後深草院二条と遊女発心譚―その今様環境と興味等に触れて―」『梁塵 日本歌謡とその周辺』桜楓社、一九八七年。
- (13) 前掲(4) 標宮子氏の論には、「二条尼の東下りの最大の目的は、前編で破綻した院との関

係を自らに問い、深い悲しみと懊惱をはらして、自分の生の意味を模索することにあり、また「父の菩提を弔うために、五部大乘経書写供養の宿願を果たすことも、彼女の諸国行脚の大切な目的であった」と指摘されている。また、阿部泰郎氏は、「崇徳院と同じく五部大乘経を書写しながら、敢えて供養をせず死んだ有明は、いわば転生を期して魔界にさまよえる魂である。それ故に、作者は、自らの五部大乘経書写と供養奉納までを内心に秘めた「宿願」となし」た、と論じている（『とほすがたりの王権と仏法―有明の月と崇徳院―赤坂憲雄編『叢書・史層を探る』王権の基層へ』新潮社、一九九二年五月）。

(14) 同注(6)。

【引用テキスト】『とほすがたり』、陽明文庫本『山家集』は新潮日本古典集成に、文明本『西行物語』は久保田淳編『西行全集』（日本古典文学会）、松平文庫本『撰集抄』は古典文庫に拠った。但し、傍線等は私意に即して付した。

〔付記〕本稿は、二〇〇九年三月に名古屋大学文学研究科に提出した博士論文『西行説話の研究』所収の書き下ろしを補訂して成稿したものである。